

# 枕草子の風土

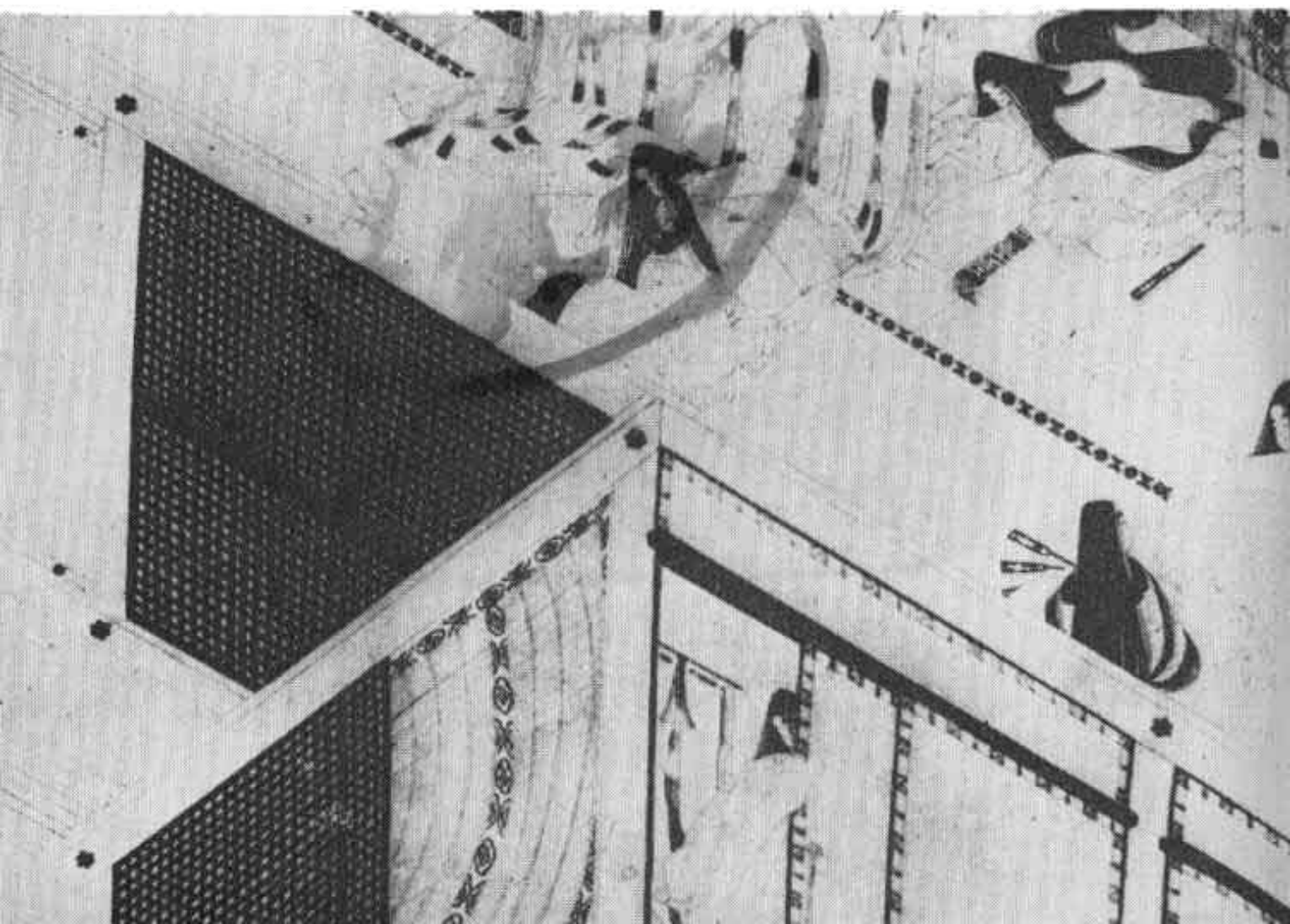
田中重太郎

白川書院

# 枕草子の風土

文学博士

田中重太郎



## 著者略歴

た なか じゅう た ろう  
田 中 重 太 郎

大正6年(1917)7月7日京都市に生まれた

### 〔学 歴〕

昭和10年(1935)京都市立第二商業学校卒業。  
昭和11年(1936)中等教員国語科検定試験合格。  
昭和12年(1937)同 漢文科検定試験合格。  
昭和14年(1939)高等教員国語科検定試験合格。  
昭和35年(1960)文学博士。

### 〔職 歴〕

昭和12年(1937)立命館中学校教諭。同16年(1941)立命館大学予科教授。以後池坊学園短期大学教授を経て、現在相愛女子大学教授・相愛女子短期大学教授。

### 〔主 著〕

「枕冊子」(日本古典全書)「校本枕冊子」(三卷)「枕冊子研究」「枕冊子本文の研究」「評釈枕冊子」「清少納言」「前田家本枕冊子新註」「評解枕草子」

### 〔住 所〕

京都市右京区竜安寺御陵ノ下町4番地の3

---

## 国文叢書 2

### 枕草子の風土

1965・9・15 初版

1965・11・15 再版

350円

著 者 田 中 重 太 郎

発 行 臼 井 喜 之 介

版 元

京都市左京区京大北門前  
株式会社 白 川 書 院

電 話 ㊦ 3 9 8 0  
㊧ 3 6 3 8

振 替 京 都 9 2 2

---

# 枕草子の風土

枕草子の風土

は じ め に …… 六

——一条天皇陵と定子皇后陵と——

一条天皇北円融寺陵（八） 定子皇后鳥戸野陵（二三） 月輪  
の地（二五） 清原元輔の旧宅（二七） 定子皇后崩御（三〇）

定子皇后の性格 (三) 清少納言枕草子の著者 (三)

春はあけぼの

枕草子の風土

春はあけぼの（三）  
平安京の風土（二六）  
風土（二七）  
下

「京や」の五文字についての逸話（二六） 文学と風土と（二三）

枕草子地名一覽表(三四) 長谷寺・清水寺・石山寺への参詣

雪・月・花・星………五〇

雪の生涯(五〇) 初宮仕(五〇) 雪の山(五〇) 香炉峯の雪

(五二) 降るものは(五四) 定子皇后葬送の日の雪(五四)

月(五五) 月光の美(五五) 月と水と(五五) 月と雪と(五六)

雪月花のとき(五七) 花(六三) 木の花(六六) 草の花(六八)

薄(六九) 星(七二) 五節供(七三) 七夕伝説 (七三)

ほととぎすの文学 ……七九

動物への関心〔清少納言と紫式部と〕(七九) ほととぎすの

文学(八五)

まつり………八六

祭(賀茂祭)(八八) 賀茂へまゐる道に(九二) 五月の御精

進のほど(九五)

ところどころ………九七

逢坂の関(九七) 紙屋川(一〇三) 比叡山(一〇四)

出自

——清原氏——……………107

清少納言の名(二〇七) 清少納言の父祖・子孫(二〇七) 清原

氏系図(二〇八) 夏野の墓(二二〇) 車折神社(二二五)

遺蹟……………119

一 四国三日の旅

——清少納言の遺蹟を訪ねて——……………120

終焉の地についての諸説(一二〇)

金刀比羅で池田 勇(一二六) 清少納言塚の碑と夢告げ茶

屋 柿谷雄三(一二三) 清少納言の祠 松本和巳(一二四) 尼塚さ

ん 富永 勝(一二七) 鳴門の清少納言尼塚 岡本博文(一二五)

二 京 洛……………123

清塚(一二五) 清原深養父旧蹟(一二五)

三 奇特百歌仙

——清女の墳——……………127

清女の墳本文翻刻(一二七) 源氏物語歌碑(一二二)

## 附說

王朝女流の末路 …… : 一六五

末路(二六五)    平安時代の三才媛(二六五)

小野小町(二六六)

和泉式部(二七〇)    清少納言(二七一)

む  
す  
び

随筆文学枕草子の成立——  
わが国最初の随筆文学（二八三）  
跋文（二八四）  
成立年時（二八九）  
枕草子の諸本（二九〇）

## 主要参考文献

主要参考文献  
——枕草子を読む人のために——  
：  
：  
：  
：  
：  
：  
：  
一九六

[illegible]

- (1) 引用枕草子本文段落索引 (2) 人名・事項・語彙索引 (3) 掲載写真一覽

カパー写真 清水寺塔



## は　じ　め　に

この書は「万葉集の風土」「源氏物語の風土」「平家物語の風土」「芭蕉の風土」などとともに一連のシリーズとして世に出るものであるが、それらの書とかならずしもおなじ形式なり、叙述態度なりを採っていない。これは、各著者の意図が多少異なることにもよるが、主として作品そのものの性質の相違によるものである。

いうまでもなく、万葉集は、韻文であり、その作者は、名のわかっている者だけでも約五百名にのぼる。これに対して、源氏物語は、散文であり、作者は一人の女性である。かりに作品にあらわれる地名が実在であること、作品の制作環境が似ていることなどに共通点があるにしても、この二つの作品の風土の問題を考え、それらについて叙述する方法・態度には、おのずから異なったものがあるのはやむをえないことであらう。

清少納言の枕草子は、随筆文学である。それは、平安時代の中期、一条天皇のころに一人の女性の書いた随筆であるが、その中には、自然と人生とに対する随感随想のほかに、「山は」「木の花は」「鳥は」「あてなるもの」「にくきもの」「うれしきもの」のごとき題のもとに、作者が興味をもついくつかの事象を書きとどめた、いわゆる類聚諸段といわれる文があり、また、

宮廷女流日記といえる章段もあることは、ご存じのとおりである。

この枕草子の内容を全部読まないで端的にこれを理解するためには、その作品の、あるがままの姿で、はじめから読んで行くわけにはいかない。もし、清少納言枕草子を第一段から最後の章段まで、この本の叙述形態でまとめるならば、すくなくとも五百ページを超えるであろう。そこで、本書は、目次に示したような分類によって、枕草子の眼心かなめというか、要とみるべき章段を原文と解説文と写真とで味わい、この一冊を読むことによって、清少納言の枕草子全巻の内容をできるだけ完全に理解できるように、また、その作品の風土をよく知ることができるよう、くふうしてみた。そのわたくしの意図が、はたして、どの程度まで実現できたかは疑問であるが、いちおう巻頭にこのことをしるして読者の御諒解を得ておきたい。

なお、本書に引用した枕草子の原文には、ところどころ注解や現代語訳をつけておいたが、これはどこまでも古典の原文理解への便宜上のことであって、だいたいの意味がわかったら、原文——すくなくとも日本人にとって、日本の古典はどこまでも原文——で味わっていただきたい。口語訳はしよせんその手段に過ぎない。

# みちね

## ——一条天皇陵と定子皇后陵と——

昭和四十年（一九六五）正月四日の薄暮、わたくしは、竜安寺の裏山——正しくは、朱山という——にある一条天皇北円融寺陵に参詣すべく、三人の友といっしょにその参道の石段を登っていった。夕暮れで、空気は冷たいけれども、風もなく、今年は、比較的暖いお正月である。このあたりの山に数回の放火があったために、参道の入口には、午後五時以後入山禁止の柵がしてあった。喫煙しない四人は、五時をすこしまわっていたけれど、禁を破って登って行った。

黄昏の双ヶ丘、暮れなずむ仁和寺の五重の塔などが墨絵のように見える。次第に加わる冷氣にうたれていても、肌が汗ばみ、息が切れはじめるころ、やっと御陵の前にたどりついた。

「あのガスタンクのずっと左横、京都タワーの左の方、つまりここからみて東南にあたるところだが、対角線約八キロのところに、定子皇后の鳥戸野陵とりべがある。あれほど仲のよい御夫婦であり、定子皇后が御臨終に

夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

——わたくしが死にましてから後、陛下がどんなに悲しまれることでしょうか。涙が出なくなると、血の涙が出ると申しますが、その色が見とうございます。——

と心をこめて詠まれ、また  
煙<sup>けぶり</sup>とも雲ともならぬ身  
なりとも草葉の露をそ  
れとながめよ

―火葬でなく、土葬  
にしていただくわた  
くしを草葉の露にい  
つまでもおしのびく  
ださいませ。―

と悲しくおうたいになつて  
も、亡<sup>な</sup>くなってからこうし  
てお二人がはなればなれに  
なつていらつしやるなん  
て、おいたわしいことだね。  
その点、われわれ庶民は、  
ありがたいよ。もちろん、  
お二人の霊は、いつでもい  
つしよにいらつしやるんだ  
ろうがね。」

一条天皇陵から双ヶ丘を望む





一条天皇陵

といって、わたくしは笑った。同行の三人の友は、みなすでに妻帯者であり、それも恋愛結婚をした人ばかりである。

一条天皇北円融寺陵には、堀河天皇後円教寺陵を合祀してある。

この御陵の東南から見おろすと、真下<sup>ました</sup>にわたくしの家が見える。もちろん、わが家だけではない。竜安寺御陵<sup>りやうあんじごりやう</sup>ノ下<sup>した</sup>町<sup>まち</sup>という町名の家のほとんどは、その名のとおりこの陵下に見おろせるのである。

わたくしは、昭和三十三年十月十五日に、竜安寺御陵ノ下町四番地<sup>はく</sup>を下し、地鎮祭をして、家を建てることにした。

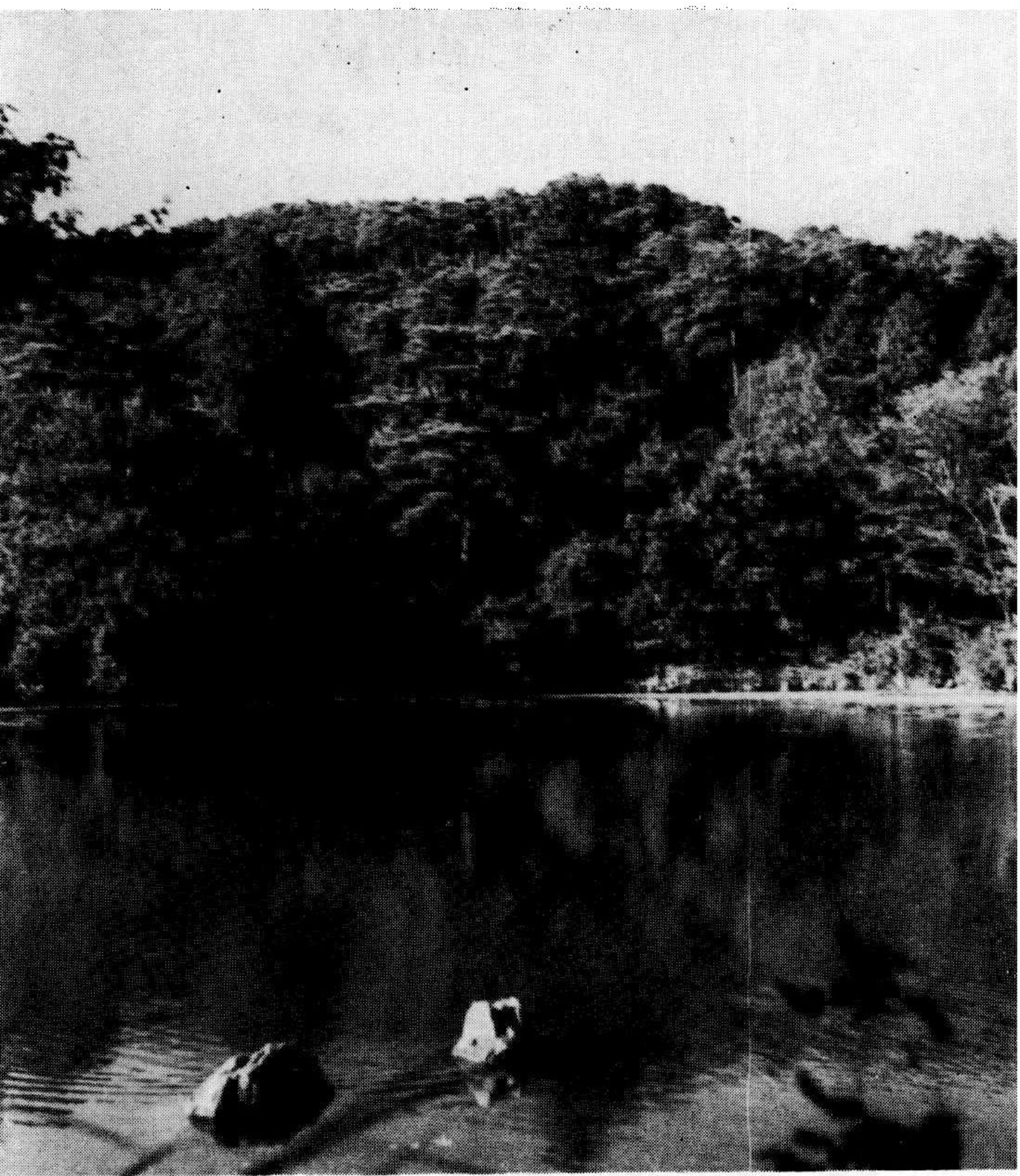


そして翌年二月一日に三十数年住み馴れた西ノ京中保町なかほちようからここに移り住んだ。このあたりは洛西北のオゾン地帯といわれているが、そのせいか、ここに住んでから、病む身がすこしずつよくなっているようである。

移転したところは、家の二階から南西にやわらかい曲線をもつ双ヶ丘がよく見え、東北にうつくしい比叡山の姿を遠望することができたが、二年後には南に家が建って双ヶ丘は全然見えず、今春になってからは東に立命館大学の衣笠学舎が建って比叡の山の姿までも見ることでできなくなってしまった。ただ、衣笠山の緑だけはあいかわらず毎日ながめられるし、竜安寺の境内を散歩すれば、鏡容池（鴛鴦池えんおうち―おしどり池）に平安のむかしをしのぶことができる。そしてそこから、いつでも一条天皇陵が遙拝できる。このしあわせは、いまもつづいている。わたくしの終焉えんの地はもとよりどこに

一条天皇陵から定子皇后陵を望む





竜安寺鏡容池（鷺鷥池）から一条天皇陵を望む。前の二つの石は、水分石で、水底からの高さは四メートルあるという。





定子皇后鳥戸野陵の登り口

なるかわからないが、三十年間一条天皇の御代みよの文学を専攻している自分にとってその陵下に住むことはしあわせである。わたくしはいまこの幸福感にひたって、本書の原稿を書いている。

京都の東山七条を南へ行く市電に乗って、一つめの停留所は、「今熊野」である。。「いまぐまの」は、正しくは、というよりも、古くは、「新熊野」と書くのであるが、それはともかくとして、この停留所から東南五、六百メートルのところに剣神社つるぎがある。いつのころから鎮座しましたかは知らないが、乳幼児の肝虫封じとして有名で、治癒したお礼には、飛び魚の板画を奉納してある。このお社は、伊弉諾尊・伊弉冉尊いざなみのみことの両神と白山姫いざなみのみこととをお祀りしてあり、新熊野神社——そ



の界限では、「権現様」と呼んでいる——の神輿もここから出るそうである。

そのお社からさらに東南方、音無し川にかかる円通寺橋を渡ると、間もなく鳥戸野の陵の前に出る。

鳥戸野陵は、申すまでもなく、一条天皇皇后定子を土葬にし、醍醐天皇皇后穩子、一条天皇御生母詮子、後朱雀天皇皇后禎子、後冷泉天皇皇后欽子、白河天皇中宮賢子、贈皇太后苡子を火葬にした広大なみささぎである。このあたりは、「鳥部山は桓武天皇平安城に遷都の時、此の地を諸人の葬所に定めらる」（八代集抄）の「とりべ山」の南にあたり、その附近に月輪の地がある。月輪には、清少納言の父清原元輔の邸宅があり、清少納言自身そのあたりに住んでいたことは、赤染衛門集・公任卿集の左の記事によって知られる。

元輔が昔住みける家のかたはらに清少納言住みしころ、雪のいみじく降りて隔ての垣もなくたふれて見わたされしに

あともなく雪降る里の荒れたるをいづれむかしの垣根とかみる  
(赤染衛門集)

清少納言が月輪にかへり住むころ

ありつつも雲間にすめる月の輪をいく夜ながめて行きかへるらむ  
(公任卿集)

右の赤染衛門集の詞書には、「月輪」の地名が見えないから、それがどこであったかたしかめられないが、公任卿集の方は、「月輪にかへり住むころ」とあり、「ありつつも……」の歌の文句から考えて、後宮に仕えていたのが途中で帰ったのかとも想像せられる。

なお、赤染衛門集の歌は、詞書や歌の字句に多少の異同はあるが、新古今集（巻十六 雑上）